

東北紀行

Tohoku Travelogue

第 31 号/2019 年 7 月/編集：丸岡泰（石巻専修大学）

慶長使節 400 年

「ハボンさん」の映画ができるまで

ドキュメンタリー映画監督 我謝 京子

すべては、スペインのバルセロナから始まった。2013 年 9 月、私の監督作品「311：ここに生きる」が、バルセロナの映画館で上映された。東日本大震災で被災した女性たちの心の復興の映画だ。私の母校である上智大学の教授と学生たちがスペイン語の字幕をつけてくれたことで、350 人以上の観客が詰掛け、劇場は、バルセロナに住む日本人はもちろんのこと、スペイン人の観客で満席となり、立ち見客が出るほどだった。遠い日本の大災害に心を痛め映画を見に来てくれた観客たち。

ありがたさで、胸が熱くなる上映会だった。それから数ヶ月後、私宛に送られてきたのが、在スペイン日本大使館からの感謝状だった。そこには慶長遣欧使節四百周年記念事業と記されていた。この日を境に、私はこの慶長遣欧使節、そして支倉常長、さらには伊達政宗について、意識するようになり、関連記事などを読むようになっていった。その流れのなかで、1 年後の 2014 年、ニューヨークで発行されている「週刊 NY 生活」という新聞にニューヨークの合唱団が、慶長遣欧使節四百周年を記念して、スペインに赴き、支倉常長が滞在したセビリアのアルカサル宮殿の庭園でコンサートを開くという記事を見つけたのだった。興味を持った私は早速、この旅



Tシャツに「ハボン 1614 年からの起源の苗字」（「ハボンさん」より）

行の主催者に連絡を入れ、ニューヨークの寿司屋で会うことになった。そこで出会ったのが、ニューヨークの合唱団「JCH とも」の音楽ディレクターであり、伊達政宗を敬愛する仙台出身のマイク白田氏だった。彼の話聞くうちに、伊達政宗がメキシコそして欧州に派遣した支倉常長が、最初に足を踏み入れたヨーロッパの村、スペインのコリア・デル・リオでもコンサートをすることがわかった。寿司を食べ終わる頃には、私は、白田氏の伊達政宗や支倉常長、さらには 400 年前の「使節団」への強い思いに感動し、合唱団の訪問映像の記録係としてこのツアーに参加することになっていた。

現地に到着するとすぐに大勢の「ハボン（日本）」という苗字をもつ人たちがホテルの前で、合唱団を出迎えてくれた。彼らこそが、400 年前に、「慶長遣欧使節の一員」としてコリア・デル・リオに足を踏み入れ、ついに使節団が欧州を離れる時に、ふたたびこの村にたどり着いた時に、日本に帰らないという選択をした人々の子孫と言われている人たちだったのだ。そして、いま、この街には、支倉常長像が、慶長遣欧使節がやってきたグアダルキビール川を見下ろすように立っている。この像の前で「ハボンさん」たちにインタビューすると、皆口々に、いかにこの侍を誇りに思っているかを話してくれた。そしてここでも震災からの復興を続けている日本への想いを語ってくれた。滞在中、私は無我夢中で、「ハボンさん」と合唱団の交流を記録しつつあった。それを、ニューヨークに戻ると早速、3 本の DVD に編集していった。1 本は旅行記、残り 2 本はアルカサル宮殿のコンサートとコリア・デル・リオのコンサートだ。完成すると白田氏は、自宅に合唱団員を集めて上映会をしてくれた。

自ら撮影し、編集したこれらの作品。映像をみればみるほど、これは合唱団の中だけで鑑賞する作品ではなく、公開できる 1 本の映画になるのではないかと確信した。その後、2 度、追加取材でコリア・デル・リオを訪れた。訪れる度に「ハボンさん」たちは、400 年前にやってきた慶長遣欧使節団そして支倉常長とのつながりを





「ハボンさん」より

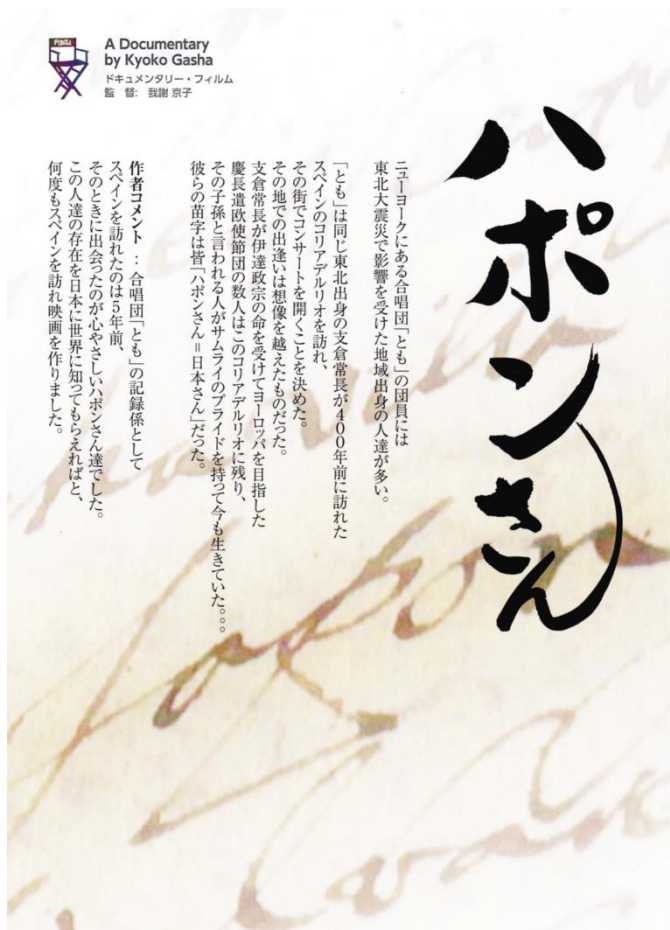
なっていた。

いまこの原稿を、私は仙台で仕上げている。昨日は、支倉常長誕生の地と言われる山形県米沢市大字立石にある関小学校で在校生に、「ハボンさん」の映画を、私の解説付きで上映した。400年以上前にこのおなじ場所で子供時代を過ごした支倉常長が大航海をしてスペインやイタリアを訪れ、その使節団の一員の子孫とされる「ハボンさん」たちの存在を知った小学生たちは、素直に驚いていて、ニューヨークからこの小学校にやってきて上映会ができたことを感謝した。東京出身で仙台や米沢とは縁がなかった私が、東日本大震災以降、どんどんと東北の方々との絆が生まれ、その絆によって、バルセロナまで導かれ、ついには、支倉常長のゆかりの地である米沢や川崎町そして仙台、石巻と「ハボンさん」の上映が続いている。

いつの日か、今度は、この映画を、コリア・デル・リオやセビリアはもちろんのこと、バルセロナでも上映してみたいと強く思う。

<p>GASHA Kyoko 我謝 京子 氏</p> <p>ドキュメンタリー映画監督／ ライターキャスター・ シニアプロデューサー</p> <p>1963年東京生まれ。高校3年 で AFS でオレゴン州に留 学。</p> <p>1983年上智大学外国語学部イ スパニア語学科入学。</p> <p>1985年マサチューセッツ州 立大学アマス校に交 換留学。</p> <p>1987年に上智大学外国語学部イ スパニア語学科卒業、テレビ東京入 社。</p> <p>1991年、フルブライトジャーナリストとしてミシガン大学大学院、 ミシガンジャーナリズムフェローに。</p> <p>2001年にライター報道記者としてニューヨークに赴任。 2001年9月11日に全米同時多発攻撃事件で被災して以来、心の復興 をテーマにドキュメンタリー映画製作を開始。 2009年に第1作「母の道 娘の選択」、2011年「311：ここに生きる」、 そして2018年「ハボンさん」が完成した。 ニューヨーク在住。</p>	<p>関小学校の皆さんと筆者</p>
---	--------------------

*2019年7月12日、石巻専修大学にて東北支部主催「映画「ハボンさん」上映会と我謝京子監督ライブトークの集い」を実施。



映画「ハボンさん」ポスター

とても大切に生きていくことを実感できた。そこには、ニューヨークで気ぜわしく生きている私とは違い、コリア・デル・リオを流れるグアダルキビール川のようにゆったりとした時間のなかで、日本に思いを寄せて大らかに生きている「ハボンさん」たちが大勢いる。私が取材した2014年時点では人口約3万人のコリア・デル・リオには、600人以上のハボンさんたちが住んでいた。取材がすべて終了した2017年、本格的な編集作業が始まった。

私のドキュメンタリー映画制作の方法は、まず台本ありきではなく、取材した映像を見ながら事実を積み木のように積み上げるようにして作って行く。積み上げては壊し、積み上げては入れ替えて行くうちに全体像がようやく見えてくるのだ。どこに重きをおくか、そして誰を主役にしたらいいのかと映像と格闘しながら決めて行く。合唱団か、白田氏か、いや伊達政宗か、支倉常長かと試行錯誤を繰り返すうちに、ここは原点に戻り、「ハボンさん」たちを主役にするのが一番だと映像が最終的に私に教えてくれた。

そして、2018年9月、ようやく出来上がったのが20分の短編映画「ハボンさん」だ。大震災からの復興の映画「311：ここに生きる」のバルセロナでの上映会からちょうど4年、映画は完成した。そして映画「ハボンさん」もまた、400年前の震災からの復興がサブテーマと